

多田政一博士の著書から (87) 詳細版

第四部 植物性神経平衡について<解説編>

理事 田中敏彦氏選

1935 年 (昭和 10 年) 刊行『綜統醫學提唱論』より

解説

《所感》

9 月号のジャーナルのテーマである『植物性神経平衡』の結論は、『活殺自在な平衡を持ち得る人こそ、眞の全人であり中庸を生かし得る』と言う言葉に表されていると思います。これこそが多田博士の言われる【生者】として生きるための真骨頂ではないでしょうか。

様々な知識は、枝葉や実のようなものです。それらは丈夫な根や幹があって初めてその真価が発揮できるのです。

ここで多田博士の考察力の背景にあるものを考えていきたいと思います。

多田博士は、漢学者で東洋思想にも造詣が深い多田北溟と言う父親の影響を多大に受けて育たれ、そこから人間が本来持っている自然治癒力を最大限に発揮させる東洋医学に可能性を見出されました。その考察力の根底には東洋医哲学がありましたが、その考え方の基本は全体観、局所観をベースとした総合統一観というものでした。(その世界観も東洋医哲学によって養われたものかもしれませんが。) バランスに重きを置かれる多田博士は、当時の医学は局所観的観方 (世界観) が主流でしたから、全体観的医学を説かれたのです。もし当時の医学が全体観に偏っていたなら局所観的医学を説かれたことでしょう。そして全体観と局所観を総合統一して、特に食・農・医の分野から人間というものの改造を研究されたのです。

※ここで〈人間改造〉という言葉が誤解しないために言っておきますが、人間が健康と幸福 (生者=眞の全人) を実現できるよう医哲学の分野から生活習慣の改善を研究されたのです。それを人間改造と言っていました。今では〈生活医学〉と言っています。

博士は、常に平衡 (バランス、中庸) ということを念頭に置いておられたのです。これを

多田博士の言葉で言えば【中庸道】だと思います。

【中庸道】という言葉は辞書にはありませんが、「中庸の道」であれば論語に出てくる孔子の言葉です。孔子思想の核心をなすものであり、人生の大道と云えるものです。中庸の「中」は偏らないことを意味し、「庸」は変わらないことを意味します。医学のみでなく、人生を歩む上で偏らない正道を常に歩むことが大切です。そんな多田博士の言わんとするところは、いつも一貫していると思います。全ての肉体のシステムは、活殺自在な平衡（中庸道）によって成り立っており、綜統医学もその道の上に理解され、総合統一されて出来上がったのではないかと思われま

多田博士が実例として述べておられる『胃及十二指腸潰瘍^{かいよう}と植物性神経平衡との相関』ですが、潰瘍は迷走神経緊張症（ワゴトニー）的な人に多いようです。しかし重要なのは、何故ワゴトニーになるのか、更に何故ワゴトニーが潰瘍を招来^{なげ}するのかの動的^{どうさつ}全体的洞察を求めることにあります。

そして重要な文章が2つあります。

一つは『精神^{せいしん}即^{すなわ}肉體的^{にくたいてき}に全體性^{ぜんたいせい}、即^{すなわ}ち中道^かを缺いた環境^かそれが全身へと絶えず働きかけてをる限は、生命の全体的平衡^{しやうたいへい}が障^{しょう}碍^{がい}されて自ら病魔^{びやうま}を招^{しょう}来^{らい}している事を忘れては治病は

おろか、保健の任務^{ほっけん}は發見^{はつけん}し遂行^{すいこう}されるべくもないであらう。』というものです。

即ち「全体性（＝中道）を欠いた環境が絶えず全身へと働きかけている限り、生命の全体的平衡が障害されて自ら病魔を招いていることに気づく必要がある」ということでしょう。もう一つは『なるとなれば人生の行路それは正常限界のジンバチコトニー及びワゴトニーの週期的交替の下に、右に左にと振りながら中庸道を作り出して行く^{ところ}處にあるからであり、この週期的交替こそは四六時中の正しき環境によってのみ旨く去來されて行くからである。』

要するに、人生の行路というものは、正常限界内においては交感・副交感神経の周期的なバランスの基で行われるが、それは正しい環境によってのみ成されるということ。注目すべきは、提唱論で明らかにされている『正しい環境』ということになるでしょう。

《語句説明》

●**神経**には**中枢神経**と**末梢神経**があります。

中枢神経とは、脳と脊髄^{せきずい}に存在する神経を言います。

中枢神経は脳（大脳、小脳、中脳、間脳、^{きょう}橋、^{えんずい}延髄）と脊髄からなります。

末梢神経とは、脊髄から身体^{しんたい}の各部位に伸びている神経を言います。

末梢神経には、**体性神経**と**自律神経**の二つの神経があります。

- 自律神経**は**植物性神経**とも呼ばれ、**体性神経**と対をなしています。

体性神経：自分の意思で動かすことのできる神経。**運動神経（遠心性神経）**と**感覚神経（求心性神経）**があります。

自律神経：自分の意思とは関係なく、常に働いている神経をいいます。
自律機能を調整する神経です。

- 自律神経**は**交感神経**と**副交感神経**から出来ています。

交感神経とは、脊髄から出ており、興奮や緊張時に優位になります。

副交感神経とは、脊髄と脳幹から出ており、睡眠時やリラックスしている時に優位になります。

※自律神経は、末梢神経に分類され、内蔵や血管などの、“意識とは無関係に働いている”
器官を制御している神経のことです。

- 自律神経と迷走神経の違い。

自律神経は末梢神経です。

迷走神経は脳神経にふくまれる神経で、**体性神経**（運動神経と感覚神経）と**副交感神経**が
合わさった神経です。

- ジンバチコトニー（交感神経緊張症）**

バランスが崩れて交感神経が働く場合はジンバチコトニー（交感神経緊張症）と呼ばれ、
副交感神経が優位の場合はワゴトニー（迷走神経緊張症）と言います。

- ワゴトニー（迷走神経緊張症）**

現代では**迷走神経反射**と言われています。

強い痛みや精神的ショックなどの極度なストレスなどが原因で、自律神経のバランスが
崩れ、血圧や心拍数の低下から脳に十分な血液を送れなくなることで起こる症状。

- 「生者」とは

人間としての成功とは、**生者**として子孫が永久に栄えること以外にはありません。

生者に対して、**俗者**や**聖者**があります。

多田博士は「人間改造運動の眼目」として以前発行されていた《月刊人間改造》誌に掲

載されていたので、それを転載します。

【人間改造運動の眼目】

《主張》

- ★ 金や力の成功者の子孫も滅びます。(俗者)
- ★ 聖者としての成功者の子孫も滅びます(聖者)
- ★ 人間としての成功とは、生者として子孫が永久に栄えること以外にはありません。(生者)

《目標》

- ① 夫婦の間に不和不信と過和過信をなくすことが「第一の目標」です。
- ② 親子の間で、腹蔵なく話が出来て、決めたことは必ず実行できるようになることが「第二の目標」です。
- ③ 病気とか悩みとか利害とかの不安は「信」を確立することによって必ず消滅してゆきます。これが「第三の目標」です。

《方法》

- ◆ 決めたことの実行が伴わないのは、日常の食生活に甘さや、辛さがあるからです。食生活の革新を必ず実行してください。
- ◆ 日常の食生活の我ままな人は、話を決める時に甘すぎたり、辛すぎたりするから、後で実行が困難になるのです。人間の言葉は、腹の中に関係があるのです。
- ◆ 約束を破った時は、経済的に「損」を実行し、食生活では小断食とか好悪の改革を実行するのです。
- ◆ 全ての実行は、自他の協力の間でやることです。すると次第に他人の見ていないところでも、忠実に実行出来るようになります。

《結び》

人類は聖者として成功することも、俗者として成功することも、それは夢です。人は人を信じられる関係を維持することによって、子孫の永遠の繁栄を得られます。人類は「生者」として成功すべきです。《月刊人間改造より》